

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# フッサールの「身体現象学」(1)「身体性の現象学」試論

著者	森村 修
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化・論文編
巻	14
ページ	171-201
発行年	2013-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/7907">http://hdl.handle.net/10114/7907</a>

# フッサールの「身体現象学」(1)

## ——「身体性の現象学」試論——

森村 修

MORIMURA Osamu

### はじめに——フッサールにおける〈身体性〉の問題

メルロ＝ポンティは、「伝統は起源の忘却である」というフッサールのことばで、「哲学者とその影」と題されたフッサール論を始めている<sup>(1)</sup>。この卓抜なフッサール論のなかで、メルロ＝ポンティはフッサール現象学との対決を通じて、フッサールが「考えないでしまったこと (impensé)」を浮かび上がらせようと試みている。

本稿では、メルロ＝ポンティが指摘したのとは違った意味で、フッサールが「考えないでしまったこと」に光を当てることにしよう。それは、フッサールにとっての、もうひとつの「影」というべき部分に着目することである。フロイトを引くまでもなく、私たちの意識には、「影」としての〈無意識 Un-bewußte〉が存在する。そして、意識という光源が明るければ明るいほど、〈無意識〉という「影」はますますその濃度を増す<sup>(2)</sup>。しかしその一方で、意識がつねに前提しているながら、その意識によっては決して“意識されないこと”、「考えられないこと (im-pensé)」がある。それこそが、フッサールにとっての〈身体性 (corporeality)〉の問題である。

私が本稿から始めようとする継続的な試みは、フッサール自身も考えてはいるけれども、はっきりと言明しなかったこと、語られてはいるが、非主題的にしか語られていないこととしての「身体性」を“意識にもたらず”ことであり、光源としての意識によって〈忘却〉され

ていた〈起源〉＝「影」としての「身体性」を「浮かび上がらせる」ことにある。

フッサール現象学にとって、意識はすでに前提されているが、その意識が“何に根ざしているか”、あるいは“何に依拠しているか”は、それほど明らかではない。それゆえ私の目的は、感覚・知覚・身体の問題に対する、個別のかつ具体的な現象学的分析にある。そこで私が導きの糸と考えているのが、一般的に『物講義』と呼ばれる1907年に行われた『物と空間』講義である。本講義でフッサールは、あまりにも朴訥な仕方、視覚から触覚、身体感覚、キネステーズ（運動感覚）概念を現象学的に分析していく。そして、本稿では『物講義』に依拠しながら、フッサールが感覚・知覚・身体をどのように扱っているかという問いに限定して、これらの諸問題を確認する。

したがって、本稿が極めて限定的な論述に終始することになることを、あらかじめ注意しておきたい。もちろん「身体性の現象学」という課題は、フッサール現象学のみならず、それを批判的に検討するあらゆる「身体性の哲学」を視野に入れることを念頭においている。さらに付け加えておこならば、感覚・知覚・身体に関する現象学的分析を通過した後、最終的には、現象学的な身体論を越えて、広い意味での「身体の哲学」を目指すことが意図されている。しかし、本稿はその端緒にすぎない。それゆえ、本稿は、フッサール現象学内部に範囲を限定して、これらの問題を検討することで満足しなければならない。

特に「身体性」の問題を、感覚・知覚・身体の問題圏を介して剔抉する際に気をつけなければならないのは、フッサールがこれらの概念をどのような次元で取り扱っており、いかなる方法論によって考察しているのか、私たちには分かりにくいということだ。例えば、『イデーンI』（1913）では、フッサールは現象学を「本質学」として規定することに伴って、日常経験的な次元で生ずる感覚や知覚、さらには経験の基盤である身体という問題は、「現象学的還元」によって、まさ

に「還元 = 縮約 (Reduktion)」されてしまう。もちろん、現象学的還元を通過した後では、通常の意味での感覚・知覚・身体概念は成り立たないことは、現象学にとって常識に属する。それゆえ私たちは、必然的に、感覚・知覚・身体の問題圏を、現象学的還元を通過した“後に”、「超越論的次元」において考察しなければならないことになる。

ここに、フッサールの内に潜む“前提”があることに注意すべきである。現象学的還元“以前”の「自然的態度 = 構え (natürliche Einstellung)」で経験する感覚・知覚体験は、現象学的還元“以後”、意識の内容として括弧に入れられてしまう。ある種の“加工”が施されてしまうといってもよい。その意味で、現象学的反省を経てえられる“体験”は、もはや純粹に日常的に経験される体験ではない。初期フッサールでは、このことはあまり自覚化されていない。そこにこそ、フッサールの無前提性の限界があるといえるだろう。この点については、フッサール晩年の弟子フィンクが、意識の「志向分析」に孕まれている「思弁的思考の問題 (das Problem des spekulativen Denkens) <sup>(3)</sup>」として問題化したし、後年デリダも「ひとつの形而上学的前提 (une présupposition métaphysique) <sup>(4)</sup>」として指摘していた。

それゆえ、私たちの日常経験の基盤を与える素朴な感覚や知覚、身体に生ずる経験は、超越論的次元で考察されることによって、真にその意味と意義を獲得しうるのだろうかという問いは避けられない。ちなみに、フィンクとともに晩年の助手をつとめたラントグレーベは、「現象学とマルクス主義における目的論と身体性の問題 <sup>(5)</sup>」のなかで、「超越論的」という概念の意味が、カントとフッサールの場合で異なることを指摘している。彼によれば、「超越論的」という概念に含意された意味の違いによって、「超越論的批判」のもつ射程の違いもまた明らかになる。フッサールの「超越論的批判」は、それが心理学や社会学などの諸科学の成果から、自らの研究を総合したり、その成果を単純に引き受けたりすることではない。それは、「個々の問題提起

の起源を前学問的な生の経験から問うこと」にほかならない。それゆえ、フッサールの「超越論的批判」とは、さしあたり前学問的な生の分析に適應され、その主題である「生世界 (Lebenswelt)」における生世界的な人間関係から生ずる概念の起源を問うことを目的とする。

しかしラントグレーベのこばをそのまま引き受けるならば、感覚・知覚・身体の現象学的分析も、「生世界的な生の分析」として、超越論的な次元で行わなければならない。つまり、超越論的な次元に立ちながら、感覚・知覚が生起する〈起源〉にまで立ち返り、生の経験から感覚・知覚を問うことによって初めて、それらについての現象学的な考察を遂行することができることになる。それでも、先の問題は解決されたわけではないことに注意すべきである。なぜなら、日常的な感覚・知覚・身体を経験を超越論的な次元でとりあげた瞬間に、現象学はひとつのパラドックスに落ち込むからだ。つまり感覚・知覚・身体とはまさに日常的な「生世界」で生きる私たちの経験の基礎になっており、感覚・知覚・身体という主題を、超越論的次元に立ちながら「生の経験」から問うこと自体が、すでに日常的生を前提にしなければならない。ここには、避けがたいパラドックスが存在する。そしてこれこそ、フッサールが晩年、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1936)〔以下『危機』と略記〕で指摘した「人間的主観性のパラドックス (die Paradoxie der menschlichen Subjektivität)」(Cf. VI - § § 53-54) である。

フッサールが現象学的還元を遂行するにあたって、「身体性」の問題を、厳密な意味で主題化しえなかったのも、感覚や知覚、身体の問題に触れるや否や、「超越論的現象学」が不可避的にパラドックスに巻き込まれることを避けたからだ。逆にいえば、メルロ＝ポンティが、現象学研究を『イデーニ II』草稿や『危機』の読解から始め、『知覚の現象学』(1945)に向かったのも、フッサール超越論的現象学の限界としての「人間的主観性のパラドックス」に気づいたからにほかな

らない。

それでは、超越論的次元に立脚した「身体性の現象学」は構築不可能なのだろうか。私はそうは思わない。少なくとも日常的経験の現象学的分析を遂行するに際して、ある種のメタ・レベルや超越論的次元に立たざるをえないこともまた不可避である。つまり、「身体性」に対して、いかなる仕方であれ現象学的な“メス”を入れざるをえない場合、ある種の超越論的な立場に立つことは必然的であり必要なのである。この点については、メルロ＝ポンティといえども例外ではない。自覚していなくとも、彼自身もまた、「超越論的哲学」の「影」を背負っているといえるのである。それゆえ、本稿では、感覚・知覚の現象学的分析が必然的に超越論的次元に依拠せざるをえないことを自覚化しつつ、フッサールの感覚・知覚の検討に入ることにしたい。

それでは、本稿の構成について触れておく。第一節では、フッサールのテキストに即して、感覚・知覚・身体の問題をとりあげる。第二節では、現象学的経験の基礎となる感覚内容について、フッサールの『物講義』を中心に、その他の著作を踏まえて検討する。第三節では、フッサールの感覚概念に対して、レヴィナスの解釈を通じて、感覚の根元的な時間的構成について触れる。そうすることで、フッサールの感覚概念の次元で、すでに時間性の問題が関わっていることを指摘する。以上から、最終的には、フッサールの感覚概念が、レヴィナスの解釈を通じて、感覚の創造性について言及することを確認しよう。

### 第一節 感覚と知覚——フッサールにおける感覚と知覚の問題

フッサールは自らの現象学のマニフェストともいえるべき『イデーン I』のなかで、物知覚と呼ばれる外的知覚（超越的知覚）が現象

学的研究にとって出発点となる経験であり、感性的経験としての根源的経験であるという意味で重要であると述べていた (Cf. III -1/81)。彼が物知覚を無視しえないのは、感覚によってもたらされた「素材 (Stoff)」としての感覚内容が、知覚による「統握 (Auffassung)」を経て、物の様々な性質を「呈示 (Darstellung)」することによって、物の「現出 (Erscheinung)」を与えるからにはかならない。つまりフッサールにとって、物現出は意識内容、いいかえれば、「体験 (Erlebnis)」として「純粹自我」に寄与するのである。

現象学が創始された段階からしばらく時間が経過した 1920 年代に至ってもなお、フッサールは物知覚としての外的知覚の重要性を指摘している。当時の講義を収録した『受動的綜合の諸分析』(1922)でも、知覚を「原的意識 (Originalbewußtsein)」(XI /4) と定義している。つまりフッサールにとって、知覚は「志向性」を保持しており、すでに意識の働きの一部を担っているといつてよい。その意味で、知覚とは“何ものかについての知覚”であり、知覚の働きには「知覚されたもの (知覚内容)」が含まれている。つまり、知覚は、知覚内容として「作用の対象 (内容)」(ブレンターノ) と関わるだけでなく、外的対象そのものとのあいだにも「志向的關係」が結ばれていると考えられる。

私たちは、こうした考えが、フッサールが「現象学的還元」という現象学という学にとって決定的に重要な概念を練り上げていく途上、1907 年の『物講義』にも現れていることに注意しなければならない。そこでは、「対象的な關係は知覚の本質に属している」(XVI /14) と述べられていた。しかも、後に見るように、『イデー I』以後のフッサールにとっても、外的知覚は、現象学的還元を遂行した後に「現象学的残滓」として残る「純粹自我」に内実を与えることから重要視されていた。

しかしここでは先を急がずに、まずは『物講義』の叙述を辿りなが

ら、フッサールが最初期に知覚をどのように把握していたのか検討しておくことにしたい。そもそも『物講義』とは、フッサール著作集 (Husserliana) 第Ⅱ巻『現象学の理念』(以下『理念』と略記)を「序論」とする、一連の「現象学および理性批判の主要部」と題された連続講義の一部であった。1907年の『理念』において初めて、「現象学的還元」の思想が形をとったことは、あらためて指摘するまでもないだろう。しかし敢えて確認しておきたいのは、『物講義』で展開された「事物性と、特に空間性の現象学の試論」が、現象学的還元概念を獲得した後に、フッサールが向かい合った最初の問題であり、最初に向かい合わなければならなかった問題だということである。その意味で、少なくとも当時のフッサールにとって、他のいかなる問題よりも重要な問題であった。

第Ⅱ巻の編者ビーメルもいうように、「超越論的考察への門戸をなすのが現象学的還元であり、これが〈意識〉への還帰を可能にする」(Ⅱ/viii)ということである。つまり、この還帰によって「対象がどのように構成されるかを観取する」ことができるのであれば、意識による対象の構成が原的に可能となる場面こそ、知覚が作動する場面であることは言を俟たない。フッサールはある草稿で次のようにいっている。

『論理学研究』は現象学を記述心理学のように思わせている(それらの研究においても認識論的関心が決定的であったが)。しかしこの記述心理学は、しかもそれが経験的現象学と解される場合は、超越論的現象学とは区別されなければならない。(中略)ところでこの超越論的現象学によって私たちが研究するのは、アプリアリな存在論ではなく、形式論理学や形式数学でもなく、またアプリアリな空間論としての幾何学でもないし、アプリアリな時間計測法や運動論でもなく、(事物や変化など)いかなる種類のアプリアリな実在的存在論でもない。超越論的現象学は



構成的意識の現象学である。したがって（意識ならざる諸対象に関する）客観的公理は何一つこの学には含まれていない……。  
 （中略）真の存在と認識の働きとのあいだの諸関連（Zusammenhänge zwischen wahrhaftem Sein und Erkennen）を明らかにし、そして一般的に作用と意義と対象とのあいだの相関関係（die Korrelation zwischen Akt, Bedeutung, Gegenstand）を究明するのが、超越論的現象学の（あるいは超越論的哲学の）課題である」（Ⅱ / x . 強調フッサール）

フッサールが現象学的還元を自覚的に用いることによって、超越論的現象学は、いわゆる「記述的現象学」（＝経験的現象学）から脱却したことになる。そして、その歴史的時点は1907年の『理念』であることが、通説となっている。「現象学的還元」概念を導入した1907年以後、「超越論的現象学」が誕生したということだ。そして先の引用にもあるように、超越論的現象学における志向性とは「作用と意義と対象とのあいだの相関関係」を意味することになる。その後、フッサールは志向性を論ずるにあたって、『論理学研究』（以下『論研』と略記）で中心的に用いていた「作用・内容・対象のあいだの相関関係」という構図から、「作用・意義／意味（Bedeutung/Sinn）・対象のあいだの相関関係」という考えへと推移していることに注意しよう。『イデー』期において決定的であるのは、「（意識）内容」から「意義・意味」へと中間項が変更されていることである。この変更は見かけよりも重要であることは指摘されてよい。

いずれにせよ、私たちにとって興味があるのは、フッサールにとって志向性概念の導入が決定的であったか否かということにある。そこでフッサール現象学が、「現象学的還元」概念の導入によって大きく方向を転換しているのかどうかを確認するために、外的知覚（超

越的知覚)に着目したい。外的知覚が『論研』期からどのように推移していくか、またどのように同一のままに止まっているのかを確認することで、フッサールにとって、外的知覚が暗黙の前提になっているか否かを確認することができるだろう。

## 1. 外的知覚の構造——感覚と知覚的統握

それではまず、『論研』で外的(超越的)知覚を含めた知覚について、どのように扱われていたかをフッサールの記述に即して追いかけていくことにしよう。

フッサールによれば、知覚の場面において、志向的関係を取り結んでいる作用と作用対象(志向的对象)とのあいだには二つの知覚が存在している。一方が内在的(内的)知覚であり、他方が超越的(外的)知覚という二つの知覚である。まずこの二つの知覚について検討してみよう。フッサールは、『論研』第五研究「志向的体験とその内容」という章の中で次のように述べている。

「<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>あらゆる知覚は、それ自身の対象を、生身のありありとした有様で(leibhaft)自己性の内に現在する(gegenwärtig)ものとして把握する志向によって特徴づけられている。知覚がこの志向に完璧な形で対応するのは、対象が知覚自身のうちに実際に、そしてもっとも厳密な意味で「生身のありありした有様で」現在し、しかもその対象がそのままのものとして、余なく把握されているときであり、したがって、知覚作用そのものの内に、実的(reel)に含まれているときである。そのとき、その知覚は十全的である」(L.U. II -1/354-355. 強調フッサール)

ここでフッサールは知覚全般について述べているが、類似の表現が

フッサールの著作・講義の随所に見られる。ちなみに『物講義』では「知覚の本質的な性格は、客観の生身のありありとした有様で (leibhaft) 現在についての「意識」であること、すなわち、それについての現象であることである」(XVI /15)と述べられている。フッサールによれば、知覚は時間的には現在に属しており、対象を「生身のありありとした有様で」与える働きである。それゆえ、一般的にいえば、知覚は、現前的 (vergegenwärtig) であっても現在の (gegenwärtig) ではない「想像」と区別される。

また注意すべきなのは、引用の後半で、十全的な知覚としての内的 (内在的) 知覚について述べられていることだ。知覚が十全的でありうるのは、「生身のありありした有様で」対象が把握されている場合、つまり内的 (内在的) 知覚の場合にほかならない。アセミッセンによれば、「内在的 (十全的) 知覚に与えられるものは、絶対的に、そして疑う余地なく与えられる<sup>(6)</sup>」。さらに、彼によれば、内的 (内在的) 知覚は反省を意味し、内的 (内在的) 知覚と反省の関係について、「すべての内在的知覚は反省であるが、すべての反省が内在的知覚であるわけではない。なぜなら、内在的知覚には、知覚として、知覚の対象の生身のありありとした現在 (Präsenz) が絶対不可欠に属しているが、しかしこれは反省一般には属していない<sup>(7)</sup>」。また『イデー I』では、反省としての内在的知覚とその志向的对象 (der intentionale Gegenstand) は、その対象が現実存在している場合には、密接不可分に結合しており、ひとつの統一的な体験流を形づくるといわれる<sup>(8)</sup> (Cf. III -1/ § 38)。それゆえ、フッサールによれば、内的 (内在的) 知覚とは、志向的对象を現在という時間様式のなかで「生身のありありとした有様で」把握することであり、それ自体が体験であるということから、射映せず絶対的なものとして与えられるのである。

十全的な知覚としての内在的知覚に対して、三次元物体や外的世界を知覚する「外的 (超越的) 知覚」は、内的 (内在的) 知覚の否定と

して定義づけられる。フッサールによれば、外的（超越的）知覚とは、知覚作用と知覚対象とのあいだに密接不可分な結合が生じていない「志向的体験」（Ⅲ -1/78）のひとつにほかならない。そして、外的（超越的）知覚の具体例が、「物知覚」である。

物知覚では、知覚そのものの対象が体験のうちに実的に含まれておらず、「その物が本質的な統一などを一切なさずに成り立つ」（*ibid.*/79）。それゆえ、物とは知覚に対して、「外的」に「超越」として存在している。そのため、（三次元的な）物は私たちの知覚にとって一面的にしか現出（*erscheinen*）せず、つねに射影によって部分的にしか自らを呈示しない。この点について、フッサールは『論研』第五研究のなかで、物知覚における対象知覚について次のようにいっている。

「統握（*Auffassung*）それ自身は決して新しい諸感覚の流入には還元されえず、それは作用性格、つまり「意識の仕方（*Weise*）」であり、「心理状態（*Zumutesein*）の仕方」である。私たちはこのような意識の仕方における諸感覚についての体験を当該対象の知覚と呼んでいる」（L.U. II -1/381）。

フッサールによれば、知覚は統握作用のひとつであり、感覚を「生気づける（＝魂を与える *beseelen*）」作用である。ただこの場合、感覚が「感覚内容」を意味していることに注意しよう。そして感覚内容とは、「知覚された対象の対応する内容に対して存在」しており、知覚にとっては「実的な内容そのもの」（XVI /45）のことである。ここで気をつけなければならないのは、感覚内容はそれ自体単独では意味をなさないということである。つまり、「諸々の感覚内容は、それ自体では知覚の性格について何も含んでおらず、一方の知覚された対象の方に、知覚が向かうことについても何も含んでいない」。しかも、

感覚内容は「物対象的なものが生身のありありとした有様で存立する (in Leibhaftigkeit dastehen) ことを成り立たせている」わけでもない (XVI /45-46)。フッサールによれば、感覚内容はそれだけでは対象をそのものとして現出させることはできないし、知覚が対象に向かうに際して、その方向性すら含んでいない。

それゆえ感覚内容が、対象の内容を「生身のありありとした有様で」呈示することができるためには、ある種の「過剰 (Plus)」あるいは「付加物 (Überschuss)」が必要となる。それこそが「意識の仕方」としての「統握」にほかならない。「私たちは、このような付加物を統握の性格と呼ぶ。そして私たちは、感覚内容は統握を経験しているというのである」(ibid./46)。またフッサールは、感覚内容と統握との関係について、感覚内容を「死んだ素材」として考えており、「死んだ素材 (ein toter Stoff)」に「魂を与える (beseelen)」という統握作用が働きかけると考えている。

「いわばそれ自体では死んだ素材であった感覚内容は、統握によって魂を与える = 生气づける意義 (beseelende Bedeutung) を獲得する。その獲得の仕方とは、それら感覚内容でもってあるひとつの対象が呈示される、というような仕方である」(ibid.)。

フッサールにとって、感覚内容に「魂を与える = 生气づける」ことができるのは、「生化 (beseelen) する」働きをもつ統握作用しかない。つまり、統握作用によって初めて、感覚対象は対象を意識に呈示させることができるのであり、感覚内容が「呈示する働きをもつ (darstellend) 内容」(ibid.) として特徴づけられるのである<sup>(9)</sup>。

また、フッサールは、統握によって「呈示する働きをもつ感覚内容」と単なる感覚内容について次のように分けていた。「統握は、自己提起する (selbststellend) 知覚と呈示する働きをもつ知覚とを区別する。

そして後者〔呈示する働きをもつ知覚〕においてのみ、知覚に実的に内在的な内容が、呈示する働きをもつ内容として機能することによって、知覚された対象への関係が遂行される。つまりこの場合、呈示する働きをもつ内容とは単に把握される内容のことではない。そうではなくて、内容の統握によって現出するものとして、統握されるものとしての内容にほかならない」(ibid.)。この場合、「自己提起する知覚」とは、『物講義』においては、内的（内在的）知覚を意味しており、「呈示する働きをもつ知覚」が意味しているのは、外的（超越的）知覚である。それゆえ、外的（超越的）知覚の場面で、統握作用によって感覚内容が〈外的対象〔の一部〕〉を呈示する働きをもつ内容として、その感覚内容を通じて〈呈示されるもの〉としての〈外的対象〉との関係を獲得する。

フッサールは、以上のような、感覚内容と外的（超越的）知覚としての統握作用との関係の分析を「まったく大雑把な分析」と呼んでいるが、それはそれとして、彼の真意を理解することはそれほど困難ではない。フッサールにとって内的（内在的）知覚は、体験として私たちの意識に「内在」しており、絶対的であり射映しない。それゆえ、内的（内在的）知覚においては、対象との関係は結ばれることはない。それゆえ、フッサールは、内的（内在的）知覚においては対象との関係をもたなくてもよいと考えているように見える。

つまり、フッサールにとって重要なのは、外的（超越的）知覚によってもたらされる感覚内容が、“何の”感覚なのか、“いかなる対象の”感覚なのかを問題にするのはあくまで外的（超越的）知覚に限られるということだ。例えば、“すべすべ”とか“凸凹”いう触覚の感覚内容は、それ自体では「単なる感覚内容」であって、“いかなる対象についての”感覚内容なのかは不明である。しかし、知覚的統握作用によって初めて、“私が見ている机の表面についての感覚”としての“すべすべ”の感覚内容であったり、“自分の骨張った手の甲の表面の感覚”

としての“凸凹”の感覚内容であったりすることによって、感覚内容と対象との関係が結ばれることになる。そのとき、私たちが指先で感じた感覚内容の“すべすべ”や“凸凹”が、“いかなる対象の感覚なのか”という問いを発することができる<sup>(10)</sup>。

それでは、感覚内容が「呈示する働きをもつ感覚内容」として、対象の性質（対象の規定性）といかなる関係にあるのだろうか。感覚が“何かの”感覚である限り、“何か”という対象の性質／規定性と無関係なはずはない。しかし、その一方で『物講義』においては、フッサールは、感覚内容は「物的与件（*physische Data*）<sup>(11)</sup>」と呼ばれているが、物的与件と对象的性質（規定性）とはまったく異なっており、物的与件および感覚内容は対象の性質をいっさい保持していないといっている。

しかし、感覚内容と対象の性質とがまったく別のものであったとすれば、両者のあいだに何らかの関係がなければ、そもそも感覚内容は対象の性質を呈示することはできないはずである。そこで、フッサールは、感覚内容とそれが対応する対象の「徴表（*Merkmal*）」との関係について、両者は完全に区別されていなければならぬけれども、同じ表現で示されるほどに密接な関係であると曖昧な表現に終始している。

「すべての感覚されたいようには、知覚された対象の契機が対応しているのであり、その関係は私たちが同じことを表現することばを双方に用いるほど密接である。そのことばとは、感覚された色（*empfundene Farbe*）と客観的な色合い（*objektive Färbung*）、感覚された音と客観的な音、感覚された形態契機（*empfundenes Gestaltmoment*）と物的形態（*dingliche Gestalt*）、等々」（*ibid.*）

しかし、感覚内容の定義からすれば、感覚内容は実的に与えられる体験を構成している契機であるのに対して、知覚された対象の性質あるいは徴表は、対象として知覚された物の側にあるはずだ。両者は明確に峻別されている。それゆえ、両者のあいだの関係は、絶対的に交わることができないはずである。もちろん、外的（超越的）知覚の志向性においては、それが「何かあるものについての知覚」として、対象との関係を取り結んでいた。しかし、感覚内容については対象との関係はありえないはずであり、対象の性質を感覚内容はいささかも含んでいない。それにもかかわらず、フッサールの言説を読む限りでは、感覚内容は対象の性質と対応しており、対象との関係を何らかの仕方  
で保持しているといわざるをえない。フッサールがいうように、確かに、感覚と対象の徴表（規定性）は対応しているかもしれないし、同じことばで表現できるほど密接な関係にあるのかもしれない。それでも、両者は厳密に区別されなければならないのだから、やはり両者の関係はいかなる関係にあるのかという問いを避けては通れない。

## 2. 感覚の志向性——レヴィナスによる感覚概念解釈

この問題について、レヴィナスは「志向性と感覚」という論文のなかで、「類似性 (ressemblance)」ないし「類比性 (analogie)」という概念を提出して検討している。彼によれば、感覚与件（感覚内容）と客観的性質（対象の規定性）との区別について、フッサールは、確かに、「ヒュレー的」内容、すなわち「心的素材の諸要素」と、それを超越する志向が思念する諸対象の性質とを区別する。しかしその一方で、レヴィナスは、フッサールが「感覚と客観的性質とのあいだに類似性という観念を保持している」〔強調レヴィナス〕のであり、それは「あたかも、類似性や類比性がすでにひとつの構成された客観的な領面を前提していないかのようだ<sup>(12)</sup>」という。



オリアンヌも指摘しているように<sup>(13)</sup>、類似性の概念は客観的領域の構成、すなわち意味的な領域の構成を前提しているはずである。またラングも、ヒュレー的で実的な作用内容（感覚内容）が、（知覚作用のような）意味賦与する作用としての対象的意味の構成に先行しているという知覚の統覚理論と矛盾して、逆に、対象的意味の構成が、体験された諸感覚内容に、それらの規定条件として論理的に先行していると批判している<sup>(14)</sup>。つまり、フッサールが感覚内容あるいはヒュレー的内容が物の諸性質に類似していると述べ、体験内容と対象的性質が部分対応していると述べる時、あらかじめ、その対応している対象が“何であるか”ということ、つまり対象的意味が前提されていることは避けられないのである。

しかしレヴィナスは、感覚が対象物的物の性質の「輪郭 (profils)」や「縮約 (raccourci)」 (= 射映 Abschattung) として、それらの性質を表し、再現前 (= 表象 représenter) [呈示 darstellen] するのだから、感覚と諸性質との差異は根本的なのか、と問うている。そして彼は、感覚内容と物の性質とのあいだにあると考えられた差異の問題を解消し、最終的には、感覚の身分を別の次元で確保しようとする。そこで、レヴィナスが目を向けたのが、感性的直観である。

「感覚〔内容〕は、諸対象の類<sup>・</sup>比<sup>・</sup>物 (analogon) となり、直観的作用——「原初的なもの (l'original)」に、「存在そのもの」に、「骨肉を備えた存在 (l'être en chair et en os)」に到達する作用——に、存在者のこの例外的な現在 (présence) を保証しさえするのである<sup>(15)</sup>」 [強調レヴィナス]

フッサール感覚概念を解釈するレヴィナスによれば、感覚は、直観作用のなかで物の性質の類似物であることによって、純粹に体験の実的内容ではない。しかしまた、類似物という性格から帰結するが、感

覚もまた物の性質と同じではない。レヴィナスは、「対象は、体験されてはいるが、ただその対象に近似した (*semblable*) 内容によってしか再現前〔表象〕されない<sup>(16)</sup>」という。そして、「フッサールにとって、感覚は萌芽的な対象としての客観的な側面にも存在せず、解釈を要求する生の事実としても存在しない<sup>(17)</sup>」と述べ、レヴィナスは感覚が獲得する新しい次元を位置づけようとする。

もちろん、レヴィナスの解釈は、フッサール感覚概念を新しく読み変えることで、フッサールが抱え込んだ感覚内容と物の性質との差異問題について、ある一定の回答を与える可能性がある。そして私としては、フッサールのアポリアの解決を目指すよりも、レヴィナスにならってフッサール感覚概念の可能性に目を向けてみたい。そこで、レヴィナスの行論に沿うかたちで、彼が提起した“別の次元”の可能性を模索してみよう。

レヴィナスは、フッサールのアポリアを、自らの哲学の方向性を開くものとして積極的に利用している。というのもレヴィナスは、感覚の曖昧な性質・存在の仕方に目を向けることで、能動的な感性的直観に対して、感覚の受動性を評価するからである。彼によれば、「直観作用というのは、ひとつの現在 (*présence*) を思考する志向であると同時に、主観におけるひとつの内容の——不可欠な——現在である<sup>(18)</sup>」。つまりフッサールのことばで表現すれば、感性的直観においては志向が充実され、その充実は対象の「絶対的なそのもの自身であり、しかも対象のあらゆる側面、現表象されるあらゆる要素に対する絶対的なそのもの自身」(L.U. II -2/117) まで到達するように充実される。そして感性的直観においては、「代表象する内容〔感覚内容〕と代表象される内容〔客観的性質〕とが同一」になり、「ものと知性の真の一致 (*die echte adaequatio rei et intellectus*) が成立」(*ibid.*,118) する。

このような「志向と出来事」(オリアンヌ) との一致は、感性的直

観によって達成され、その感性的直観は対象の存在そのものを呈示する志向や思念に基づいている。しかも重要なのは、こうした志向や思念の基礎には、不可欠なものとして感覚〔内容〕があらかじめ前提されているということだ。つまり、感覚がなければ、そもそも志向や思念が成立せず、対象の現前（呈示）も与えられないということである。感覚を通してしか対象は現前（＝現在 présenter）しない。「対象が現在すること（présence）は感覚の質料性に、非-思考的な体験（vécu non-pensé）に、由来する<sup>(19)</sup>」のである。感性的直観という意識の能動的作用に先だって、潜在的にかつ受動的に機能する感覚が存在している。

感覚（内容）がすでに意識の能動的働き以前に“受動的に与えられて”おり、それに対応するかたちで感覚作用が内容を摂取するように存在していると考えられる。この場合、感覚された内容は受動的な性格をもっており、感覚するという能動的作用にすら先行しているのである。この点について、フッサールにおいては、『イデーニ II』草稿において、より詳細に検討されることになる。

## 第二節 感覚という体験——感覚の受動的・時間的構成

ここでは、感覚の受動的性格について、レヴィナスに即して、さらに検討してみよう。というのも、レヴィナスは、感覚の受動性がその時間的性格に基づいていることを指摘しているからだ。まずは、フッサールが感覚をどのように考えていたか、『論理学研究』で再度確認しておこう。彼は次のようにいっている。

「体験された内容、ないは意識された内容と体験それ自身とのあいだには、何の相違もない。例えば、感覚されたものは感覚にほかならない」（L.U. II -1/352）。

この点について、メレは「痛み之感覚への反省が判明に示すように、感覚作用はその内容と分離されえない」と語り、「知覚作用の実的な内容は、この知覚の遂行において対象的に意識されるのではなく、そのつどの体験への後から来る反省作用において初めて、実的な内容そのものが対象となりうる<sup>(20)</sup>」といている。私たちが当然のように語っている感覚（この場合は、例えば「痛み」という感覚）は、知覚作用のなかで前提されているにすぎず、実際に、感覚内容そのものを取り出そうとするときには、知覚作用に対して、さらに進んだ「反省作用」が必要になる。外的（超越的）知覚によって統握している対象は、その知覚が対象との関係を取り結ぶことによって、私たちの意識のなかへと現れてくる。そして、その対象の知覚を分析することによって、より正確に言えば、“私たちが何を知覚しているのかということについて、さらに反省することによって”、対象のさまざまな性質や、それに対応している感覚内容を摘出することができる。このことについて、フッサールは次のようにいっている。

「以下のことについて、はっきりと知ることがもっとも重要である。つまり、諸々の感覚は外的知覚において体験されるが、知覚されないこと、そして私たちがこれら諸感覚に目を向けるとき、これが、根源的知覚、すなわち外的知覚とは全く別の性格をもつ新しい知覚において生起していること、これらのことをはっきりと知ることが最も重要である<sup>(21)</sup>」(Ms.F I 9, 19b, Zitiert nach Melle)。

メレが引用するフッサールの草稿によれば、感覚（内容）を“体験された感覚”として取り出す、「新しい知覚」（反省作用）は、もはや外的（超越的）知覚の領域には属していない。感覚内容が知覚

にとって実的であるということがいえるためには、単なる外的（超越的）知覚によってではなく、その外的（超越的）知覚に対する「新しい知覚」としての反省作用によって見出されるということ認めなければならない。つまり、対象を知覚する外的（超越的）知覚を検討したところで、感覚がいかに与えられたかという、感覚と対象との関係は得ることはできない。それは、外的知覚を反省する「内的知覚」としての反省作用によって、可能になる。これこそ、『イデーニ I』では「ヒュレー的反省」（Ⅲ -1/349）と呼ばれるものにほかならない。

同様のことは、すでに『内的時間意識の現象学』（1905）〔以下、『時間講義』と略記〕で述べられていた。

「感覚はここでは感覚内容の内的意識にほかならない。（中略）このことから、なぜ私が『論理学研究』で感覚作用（Empfinden）と感覚内容とを同一視することができたかが理解されるであろう」（X /127）。

しかし、外的知覚から、新しい知覚としての反省的な内的知覚へと段階を進めることは、はたして意味のあることなのだろうか。つまり、感覚を取り出すために反省を遂行する場合に、私たちはすでに知覚的に統握された感覚を前提にしている。すでに述べてきたように、感覚内容は、外的知覚のなかで、「素材」として“あらかじめ受動的に与えられていた”。そして外的知覚としての「統握」が、時間的に先行する「感覚内容」という「死んだ素材」を生氣づける（魂を与える）ことによって、対象が呈示されたのである。それゆえ、外的知覚が機能する直前に、時間的に先行する感覚内容があらかじめ与えられていたはずなのである。

「知覚は統握が始まるその瞬間に生ずるのであるから、それ以前

に知覚を云々することはできない。統握とは感覚与件の「生気づけ」である。それでもなおも後に残る問題は、統握は感覚与件と同時に始まるのかどうか、それとも感覚与件は、かりにどれほどわずかな時間差であったにせよ、生気づける統握が始まる以前に、構成されていなければならないのかどうかという問題である。後者の方が当たっていると思われる」(X /110)。

感覚与件ないし感覚内容は、知覚以前に構成されていたことは、上記のフッサールの文言からも明らかである。しかし、もしそうであるならば、内的知覚において見出される感覚〔内容〕は、すでに内的知覚にも先行していなければならない。なぜなら、内的知覚であれ外的知覚であれ、両者は知覚であり、感覚は知覚以前に構成されていなければならないからである。先のメレの引用したフッサールのことばにあるように、内的知覚（ヒュレー的反省）が「新しい知覚」であるにせよ、フッサールは感覚がその「新しい知覚において生気づけている」といっているのだから、感覚内容は「新しい知覚」に先行しているはずである。それゆえ、ヒュレー的反省という「新しい知覚」は、二重に遅れているといわざるをえない。つまり、第一に、感覚内容が外的知覚以前に受動的に与えられており、次に、その感覚内容を外的知覚が生気づけた後に、ようやく、最初に与えられた感覚内容に対して、ヒュレー的反省が行われるのだから。

さらに確認しておきたいのは、『時間講義』でも触れられていたように、感覚与件（感覚内容）と知覚的統握作用とは同時ではないばかりか、統握の瞬間には感覚の一部が経過しており、過去把持的に保持されているということだ。フッサールによれば、統握は「ただ単にそのつどの根元的感覚の位相を生気づけられるだけではなく、経過した広がりをも含めた感覚与件の全体を生気づける」(ibid.) ののである。このことについて、レヴィナスは次のようにいっている。

「時間の糸はひとつの同方向的多様体 (une multiplicité orthoïdale) であり、ベルクソンの相互浸透のない相互に外的な諸瞬間のひとつの連続体である。〔つまりそれは〕 内的時間であり、内的時間と共外延的 (coextensif) な客観的時間の基礎である。持続する感覚はこの〔内的時間の〕 流れのなかで伸展するが、相互に排除し合う諸瞬間のこの多様体における同一化可能な統一として感覚が感覚されるのは、各瞬間から出発して——内在的で特有の志向性のおかげで——感覚の全体が縮約的に (= 射映において *en raccourci*) 過去把持されるからである。感覚は〈射映 *Abschattung*〉である。しかし感覚は、それが〈諸々の射映〉を通して体験される場である内在のうちで自らを与えるのである<sup>(22)</sup>」。

この箇所ではレヴィナスは、ベルクソンの持続とフッサールの時間性とを重ね合わせながら、感覚の時間性を記述していることに注意しよう。レヴィナスが指摘しているように、時間的多様体のなかで、様々な感覚されるそれぞれの個々の感覚与件 (内容) は、より根元的な次元で構成されている。こうした根元的な時間性のなかで、それぞれの感覚の断片 (射映) は無限に時間化されると同時に、過去把持的に保持されていく。感覚断片 (感覚の射映) を“同一の感覚”としての「感覚 (内容) の全体」がとりまとめ、さらに高次の次元に属する知覚的統握作用が「生気づける」のである。

それゆえ、感覚与件 (内容) と知覚的統握との時間差は、感覚与件を生気づける志向性の働きが感覚に対して絶対的に“遅れる”という時間差を意味している。知覚はつねに遅れて機能するといってもよい。それは、私たちの意識が感覚に絶対的に追いつけないということだ。したがって、感覚についての反省、いわゆる「ヒュレー的反省」もま

た、すでに完了してしまった感覚についての反省であって、瞬間的に受動的に働く感覚作用そのものを捉えることはできない。所詮、時間的に変様してしまった感覚内容を二重に遅れて反省の対象にするしかない。

しかしフッサールがいうように、感覚与件（内容）そのものは、感覚作用と同一である。先に引用した「感覚されたものは感覚にほかならない」（L.U. II -1/352）ということが意味しているのは、「感覚作用を私たちは根源的な時間意識と解しているのであり、この時間意識のなかで色や音のような内在的統一体や、願望や好みなどのような内在的統一体が構成される」（X /107）ということにほかならない。それゆえ、感覚を支える根源的な時間意識においては、統握作用 - 統握内容という対応図式はもはや適用できない。なぜなら、感覚は感覚断片の集合体（多様体）として統一されているからである。

感覚与件（内容）がひとつの統一体として時間的に構成されるということは、時間的に推移する感覚与件の諸断片（射映）は過去把持的に統一されていることを意味する。もしそうであるならば、感覚与件としての諸断片もまた、それ自体が時間化されているはずだ。そして感覚内容そのものが時間化されているとすれば、瞬間瞬間の感覚断片もまたその内に時間を含んでいると考えざるをえない。しかも、ひとつの統一的な感覚与件を構成する様々な感覚断片が、その内部で時々刻々と変様を続けていると考えなければならない。つまり、時間的に分節化された感覚与件の内部で、さらに個々の感覚断片相互のあいだには時間的なずれが生じているはずだ。レヴィナスは、こうした感覚の時間的なずれに注目して、次のようにいっている。

「一部はすでに流れ去り一部はこれからやって来る感覚の同一性を各瞬間から出発して過去把持する、あるいは予持する（未来予持する）各志向は、フッサールにとって、時間意識そのもの



にほかならない。時間は諸感覚を収容しそれらをひとつの生成のなかへと引き入れる形式であるだけではない。時間は感覚を感覚すること (le sentir de la sensation) である。これは感覚することと感覚されるものとの単なる一致ではなく、ひとつの志向性であり、したがって感覚することと感覚されるものとのあいだの最小の隔たりであり、まさに時間的な隔たりである<sup>(23)</sup>」。

レヴィナスによれば、確かに時間は感覚与件を統一的に構成する根源的なものであるが、それは単なる「形式」にすぎない。それに対して、個々の感覚断片を統一した感覚与件は、それ自体ひとつの感覚内容であり、「内容」として機能している。したがって、瞬間瞬間に変移していく「内容」としての感覚内容は、時間という「形式」に支えながら、時間構成の志向性としての過去把持と未来予持によって、「今」という瞬間のなかで、対象の現在 (présence) (呈示) を統一的に構成するのである。ただここで注意しなければならないのは、感覚的直観作用が対象を現在 (呈示) させるとき、そこでは「思念されたもの (visée) と出来事 (événement) とが一致<sup>(24)</sup>」しているはずだ。

ただこの場合、〈感覚すること〉と〈感覚されるもの〉のあいだの根源的な時間構成が考慮されていなかったために、無時間的に一致が完了したように見えたにすぎない。オリアンヌが的確に指摘しているように、「志向と出来事との一致は存在するが、この一致は「もはやそこにはない」あるいは「まだそこにはない」という形式をとり、その形式なくしては、「…についての現前 (呈示)」が存在しえないのである<sup>(25)</sup>」。つまり、現前 = 現在 (呈示) とは、つねに変様としてしか理解されえないし、そのように理解しなければならないのである。

そのつど私たちに与えられる瞬間的呈示を、フッサールは「根元的印象 (Urimpression)」と呼ぶ。それは、「絶対的に変様されないものであり、その他一切の意識と存在にとっての源泉」(X /67) なの

である。しかし、これまで詳細に検討してきたように、根元的印象もまた「今」という時間に存在している以上、時間化されざるをえない。時間の経過とともに“新しい根元的印象”へと推移していかざるをえない。根元的印象は与えられるそばから、新しい根元的印象にその座を譲るのである。

### 第三節 感覚における時間差の問題

以上から明らかなように、根元的印象はつねに新しいものを創造していく働きである。「根元的印象はこの産出の絶対的な出発点であり、源泉であって、それ以外のものはすべてそこから産出されるのである。しかし、根元的印象は産出されはしない。それは産出されたものとしてではなく、自発的発生 (*genesis spontanae*) によって生ずるのであり、それは根元的発生 (Urzeugung) である。根元的印象は何かから成長するのではなく、それは「根元的創造」 (*ibid.*, 100) にほかならない。

だからこそ、瞬間的な根元的印象によって与えられる感覚は、瞬間ごとに新しい感覚であり続けることができる。そしてそれら様々な感覚断片があるひとつの感覚与件 (内容) として統一されるためには、瞬間的に経過する諸々の感覚断片が過去把持的志向と未来予持的志向によって構成される必要がある。こうした感覚断片を構成するものこそ、根源的な時間性といってよいだろう。

それゆえ、意識の志向性が働くためには、それに先立って、様々な感覚断片が受動的に与えられているだけでなく、ひとつの感覚与件 (内容) にまで時間的に構成されることが前提となる。そうした感覚与件を、知覚的統握が生気づけるのである。しかし注意しなければならないのは、こうした分析は、知覚された対象に対して、あくまで遡行的に振り返った、無時間的な「超越論的な立場」からの記述にすぎない

ということだ。

事柄の順番からいえば、個々の感覚断片が根源的な時間の流れのなかで受動的に構成され、次にそれらを統一的な感覚与件へと感覚作用が構成し、最後に、感覚（作用と内容の統一体）という「素材」が、知覚作用によって生気づけられ、それをヒュレー的反省という高次の内的知覚が把握するということになるだろう。

この場合、感覚は《静態的》な立場で分析すれば、知覚的統握作用の生気づけの「素材」にすぎないが、《発生的》に見れば、実際には、二つの働きをもっていることが分かる。つまり、根元的発生として、時間的に推移していく感覚断片としての感覚と、感覚断片の統一体としての感覚である。レヴィナスはこの点に触れて、両者の感覚のあいだには、最小の時間のずれがあることを指摘していたのだった。そして、この時間差が、ある種の志向性を成立させるといってよい。つまり、レヴィナスによれば、フッサールの意図とは異なって、感覚作用が時間意識の志向性を保持しうる可能性が開かれているのである。

しかも、私たちが感覚について語る場合に、それがつねに“受動的に与えられている”と当たり前のように語ってきた。こうした言い回しに見られるように、私たちは、あらかじめ感覚を刺激する《外部》が存在することを前提している。私たちは、感覚を刺激する、感覚に何らかの刺激を与える《外部》が存在することを疑わない。そして、こうした《外部》と意識とをつなぐ架け橋こそ、感覚であると信じて疑わない。この点について、レヴィナスは次のようにいっている。

「**感**覚的**な**もの、すなわちヒュレー的**な**与件は、絶対的な与件である。確かに、諸志向がヒュレー的与件を生気づけ、そこからひとつの**対**象**経**験をつくる。しかし**感**覚的**な**ものは探求される前に、そもそもの初めから、与えられている。主観は、対象を思考する前に、あるいは対象を知覚する前に、**感**覚的**な**ものに浸

かっている<sup>(26)(27)</sup>」(強調レヴィナス)。

私たちは、感覚と知覚との関係が時間的な前後関係であるだけでなく、感覚も知覚も時間意識の流れのなかで構成されたものであり、それらは時間的に立ち止まることなく経過せざるをえないことを確認した。そして、感覚が時間的に知覚に先行することによって、感覚(内容)が当の知覚的統握にとって“あらかじめ与えられたもの”として機能していることを確認した。つまり、その意味で、感覚は、知覚的意識に対して、受動的に与えられたものと考えられることができるわけである。

その一方で、感覚自体が時間意識によって、過去把持的かつ未来予持的に構成されたものであることを忘れるべきではない。しかもレヴィナスもいうように、感覚そのものもまた、「〈感覚すること〉[le sentir]と〈感覚されるもの〉[le senti]」に区別されるのである。そして両者のあいだにも、時間化が容赦なく生起している。この〈感覚すること〉と〈感覚されるもの〉という感覚内部における分割のなかに、微細な時間差を、私たちは確認する必要があるだろう。

私たちは、レヴィナスの助けを借りることで、感覚が、単なる知覚的統握の「死んだ素材」としてのみ位置づけられるのではなく、それ自体が、創造的な働きをもつものであることを確認することができる。その意味で、フッサール現象学が意識中心的な哲学であり、志向性をもっぱら意識の特性へと局限する方向にあるのに対して、レヴィナスが構想する感覚概念は、意識とは正反対の極、つまり身体への接近していく可能性を示唆している。というのも、本稿では十分に検討されていない「受動性」という契機は、まさに感覚にとってのみならず身体性にとっても重要な意味をもつからである。

しかし、受動性を含む「身体性」の問題圏の検討は、もはや本稿の

範囲を超えているため、これ以上論述できない。この点についての検討は、別の機会に譲ることにしたい。

(未完)

[注]

(1) Cf. M. Merleau-Ponty, “Le Philosophe et son ombre” , in: *Signes*, Gallimard, Paris, 1960, pp. 201-202.

(2) フッサールとフロイトとの関係、フッサールの意識とフロイトの無意識との関係を取り上げることは極めて興味深いが、ここでは論述することができない。ただ、フッサールとフロイトがほぼ同時代をウィーンで過ごしたことや、共にウィーン大学のブレンターノと面識があったことを考えると、因縁浅からぬものを感じざるをえない。エピソード的なことを付言するならば、フロイトはブレンターノの講義に列席するだけでなく、師ブレンターノのためにJ・S・ミルの独訳を手がけるまでに親交があった。さらに蛇足ながら付け加えておくと、フッサールは『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936）のなかで「最近しきりに論議されている「無意識」——夢のない眠りとか、失神とか、その他それと同じ種類の、あるいはそれと似た種類のもので、この名称のもとに数えられているものは何であろうと——の問題」に触れ、それが「構成という超越論的問題群に属する」と述べている。フッサールが、無意識の問題を「生殖の問題」、「超越論的歴史性の問題」、「誕生と死の問題」、「意味の超越論的構成の問題」、「性の問題」などと並んで、超越論的問題群として提起したことは注目されるべきだろう（Cf. VI /191-192）

(3) E. Fink, „Die intentionale Analyse und das Problem des spekulativen Denkens “ in: *Nähe und Distanz : Phänomenologische Vorträge und Aufsätze*, Hrsg. von Franz-Anton Schwarz, Alber-Broschur Philosophie, Verlag Karl Alber, Freiburg/München, 1976, SS. 139-157.

(4) J. Derrida, *La Voix et le Phénomène : Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, PUF, 1967, p. 3.（高橋允昭訳『声と現象——フッサール現象学における記号の問題の序論』、理想社、1970年、11頁）。

(5) Cf. L. Landgrebe, “Das Problem der Teleologie und der Leiblichkeit in der Phänomenologie und im Marxismus”, in *Phänomenologie und Marxismus*, Bd. 1, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1977, SS. 71-104.

(6) H.U. Asemissen, *Strukturanalytische Probleme der Wahrnehmung in der Phänomenologie Husserls*, Kölner Universität-Verlag, Köln, 1957, S.16.

(7) H.U. Asemissen, *ibid.*

(8) フッサールによれば、内在的知覚の志向的対象は、体験であるがゆえ、実質的に絶対的であり、射映によっては呈示 (darstellen) されない。この点について、フッサールは、次のようにいっている。「体験は自らを呈示しない、とわれわれは述べた。このことの内に含まれているのは、次のこと、すなわち体験知覚はあるものの素朴な観取であり、しかもそのあるものは知覚において絶対的なものとして与えられており、(もしくは、与えられうるものであり)、だから、射映を通じた現在様式による同一物として与えられるのではないということである」(Ⅲ-1/92)。

(9) 『イデーニ I』では、「感覚内容」という概念は表面的には消失しているように見える。しかし、ほぼ同義的な意味をもつ概念として「ヒュレー」概念が用いられている。ヒュレー概念の検討は別途に行わなければならないが、少なくとも『イデーニ』期までは、「死んだ素材 = 感覚内容」を「生気づける・魂を与える = 統握 (知覚)」という図式が用いられていたと考えられる (Cf. Ⅲ-1/§85, §97)。ただここで注意すべきなのは、『イデーニ I』において志向性を語る時、フッサールは「感覚的ヒュレー」としての感覚 (内容) と「志向的モルフェー」としての知覚との「二重性の統一性」の構造を念頭においているということだ。そして、重要なのはこの構造がいわゆる「意味」の領域にも入り込んでいるということである。つまり、対象との関係をもたないとされる感覚、いかえれば“いかなる対象の感覚なのか”という問いが問えない感覚と、「意味賦与作用」としての知覚的統握作用とのあいだに、「意味」が介在するということだ。

(10) しかし、こうした問いそのものは、私たちの経験から遡行して問われていることに注意しよう。というのも、私たちは知覚的統握作用“以前に”、純粋に感覚内容だけをとり出すことは不可能だからだ。私たちは、知覚作用を取り除いて、感覚内容をとり出すことはできない。もちろん、目隠しをしたり耳栓をしたりなどして、五感のうち四感をできる限り遮断することによって、純粋なひとつの感覚をとり出すことは実験的には可能だろう。ただこうした人為的な体験／経験に基づいて、フッサールが感覚や知覚と対象との関係を取り上げているわけではない。したがって、このような不自然な = 人工的な体験現象に基づいて、純粋に感覚現象のみを取り上げていると考えることはできない。

(11) フッサールの「物的与件」という表現は、ブレンターノの感性的性質としての「物的現象 physische Pänomen」とほぼ同義と考えてよい。ただ、ブレンターノよりもフッサールの方が物の物理的性質を強調している側面が強いといえるかもしれない。それゆえ、「物理的与件」とした訳した方が適切かもしれない。

<sup>(12)</sup> E. Lévinas, “Intentionalité et Sensation” , in: *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Librairie philosophique J. Vrin, Paris, 1982, p. 149. (「志向性と感覚」(1965年)、佐藤真理人他訳『実存の発見——フッサールとハイデガーと共に』所収、法政大学出版局、1996年、p. 236。但し、訳文は文脈によって変えてある)。

<sup>(13)</sup> Cf. A. Orianne, “Translator’ s Forword” , in: *The Theory of Intuition in Husserl’s Phenomenology*. Northwestern University Press, Evanston, 1973, p. xx.

<sup>(14)</sup> Cf. B. Rang, “Repräsentation und Selbstgegebenheit : Die Aporie der Phänomenologie der Wahrnehmung in den Frühschriften Husserls” , in: *Phänomenologische Forschung I*, Verlag Karl Alber, Freiburg/München, 1978, p. 131.

<sup>(15)</sup> E. Lévinas, *op.cit.*, p. 149. (強調レヴィナス) (邦訳 p.237)

<sup>(16)</sup> E. Lévinas, *ibid.*, p. 150. (邦訳 pp.237-8)

<sup>(17)</sup> E. Lévinas, *ibid.*, p. 151. (邦訳 p.238)

<sup>(18)</sup> E. Lévinas, *ibid.*, p. 150. (邦訳 p.237)

<sup>(19)</sup> E. Lévinas, *ibid.*, p. 149. (邦訳 p.237)

<sup>(20)</sup> U. Melle, *Das Wahrnehmungsproblem und seine Verwandlung in phänomenologischer Einstellung*, PHAENOMENOLOGICA 91, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1983, S. 51.

<sup>(21)</sup> U. Melle, *ibid.*, S. 41.

<sup>(22)</sup> E. Lévinas, *op.cit.*, p. 152. (邦訳 p.240)

<sup>(23)</sup> E. Lévinas, *ibid.*, pp. 152-153. (邦訳 p.240-241)

<sup>(24)</sup> E. Lévinas, *ibid.* (邦訳 p.241)

<sup>(25)</sup> A. Orianne, *op.cit.*, p. xxi.

<sup>(26)</sup> L. Lévinas, “Intentionalité et métaphysique,” in: *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Librairie philosophique J. Vrin, Paris, 1982, p. 139. (「志向性と形而上学」(1959年)、佐藤真理人他訳『実存の発見』所収、法政大学出版局、p. 222。但し、訳文は文脈によって変えてある)。

<sup>(27)</sup> 感覚(ヒュレー的与件)について、S・ギャラガーは九つの定義を挙げている。しかし、私たちはそれらすべてを指摘する必要はない。それでも、これまでの論述に資するという意味で、下記に挙げておく(番号は、ギャラガーのそれに従う)。  
①ヒュレー的与件は、統握-統握内容という図式における内容である。そして、感覚与件は、類比的な形成材料(analogical building-staff)として機能する。

②ヒュレー的与件は、意識の志向的構造に入っているが、それ自身は志向的ではない。例えば、フッサールは、それら感覚与件は実的な構成要素であり、構成成分、あるいは意識の要素であり、ある仕方意識に「現在」する、という。そして、それはいかなる意味も持たない。

③ヒュレー的与件は、反省において抽象的にのみ把握されうる、前反省的に生きられた体験である。それは、反省的作用を通じてしか知られることがない。フッサール自身、ヒュレー的与件が抽象的なものであると述べている。そしてまた、ヒュレー的与件は、非客観的存在であるが、それらが反省において主題化されるならば、その非客観的な身分を失う。つまり、ヒュレー的与件は抽象化され、反省のための対象になる。

④～⑦省略

⑧ヒュレー的与件は、すでにそこに存在しており、つねに利用可能であること、すなわち、それらヒュレー的与件を生気づける意識的統握にとってあらかじめ与えられているといわれている。

⑨フッサールは、ヒュレー的与件と人間の身体との関係について、展開途上であり、一連の曖昧な志向を持っている。

①から⑨まで、いずれも感覚与件ないしは感覚内容について述べられている。しかし、私たちの議論の展開上、それらをどの程度重視するかという点については、ギャラガーと必ずしも一致するわけではない。ただ、本文中では煩雑になるため、ギャラガーの定義への言及は避けた。詳しくは下記を参照せよ。Cf. S. Gallagher, "Hyletic experience and lived body," in: *Husserl Studies* 3, Martinus Nijhoff Publishers, Dordrecht-Printed in the Netherlands, 1986, pp. 131-166.